

# TZ ほんの窓

第 2 号 (2004.10.22) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏図書助成コーナー「本の紹介」班

## ウィリアム・モリスとケルムスコット・プレス ～手作業の行方～

産業革命によって大量生産が可能となった 19 世紀のイギリス。しかしウィリアム・モリスを先駆者とするアーツ・アンド・クラフツ・ムーブメントは、機械生産によって市場に氾濫する製品とは一線を画した、手仕事の重要性を訴えた。その実践は後にアール・ヌーボーや日本における民藝運動に影響を与えていく。

今企画展示では、モリスと彼の設立した印刷工房、ケルムスコット・プレスを取り上げ、その思想及び実践に関する資料を展示します。そして書物の作成に関連した日本における共同作業集団に関する資料もご紹介いたします。

### (1) ウィリアム・モリスについて

まず、ウィリアム・モリスの基礎的な評伝として Philip Henderson の『William Morris : his life, work and friends』(McGraw-Hill、1967 年) 及び Paul Thompson の『The work of William Morris』(Heinemann、1967 年、\*\*213\*295\*\*) を紹介したい。前者は、芸術家としてだけでなく、詩人、社会運動家と様々な分野に渡って活動をしたモリスを、書簡を始めとする未刊資料を用いて研究し、後者はモリスの中世への傾倒に言及したものである。翻訳としては、それぞれ『ウィリアム・モリス伝』(晶文社、1990 年)、『ウィリアム・モリスの全仕事』(岩崎美術社、1994 年) が出版されている。また、日本人による研究としては、小野二郎による『ウィリアム・モリス：ラディカル・デザインの思想』(中央公論社、1973 年) 名古忠行による『ウィリアム・モリス』(研究社、2004 年、\*\*2800\*1175\*\*) がある。後者は、主として政治思想家としてのモリスを紹介している。

THE WORK  
OF  
WILLIAM  
MORRIS

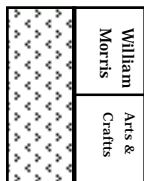
\*\*213\*295\*\*

小野二郎著  
ウィリアムモリス  
ラディカル・デザイン  
の思想

\*\*0800\*25\*\*336

### (2) アーツ・アンド・クラフツ・ムーブメントの概要

19 世紀後半にイギリスで興ったこの芸術運動は、機械による大量生産に対する批判に始まり、中世への傾倒、職人の手仕事による共同生産などを再現しようとしたものである。藤田治彦監修『ウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』(梧桐書院、2004 年) 岡田隆彦編『ウィリアム・モリスとその仲間たち：アールヌーボーの源流』(岩崎美術社、1978 年、\*Pc\*\*622\*\*34) はモリスと彼の考えに賛同した運動家の作品を多数掲載しながら、この運動を概観している。さらに、海野弘の『モダン・デザイン全史』(美術出版社、2002 年、\*\*7500\*66\*\*) は、その研究動向までを網羅した解説をしており、諸運動との関わりや影響、今後の研究対象を把握することができる。



\*\*7500\*64\*\*

また、この運動は諸外国の芸術運動にも影響を及ぼしている。日本において影響を受けた人物として挙げられるのが柳宗悦である。柳は戦前・戦後期における民藝運動家であり、『工芸の道』(筑摩書房、1981年、\*\*272\*25\*11\*\*\*)収録の論文「工藝美論の先驅者に就て」において、「初期の茶人達」と並んでモリスの名を挙げて彼に共感を示している。さらに、デザイン史フォーラム編『アーツ・アンド・クラフツと日本』(思文閣出版、2004年)においては、柳の他に様々な事例を挙げてこの運動が日本においていかに受容されたかを検証している。

アーツ・アンド・クラフツと日本

### (3) ケルムスコット・プレスについて

ケルムスコット・プレスはモリスが1891年に設立した私設印刷工房で、手工業を理想とするモリスの芸術活動の一環をなすものである。William S. Petersonによって編集された『The ideal book : essays and lectures on the arts of the book』(University of California Press、1982年、\*\*Ag\*\*991\*\*)は、モリスの書物芸術に関するエッセーや講演、そして印刷工房を設立するに至った経緯が収載されており、紙、活字、そして文字の間隔などに対する彼の「理想」を知ることができる。また、同じくPetersonの『ケルムスコット・プレス：ウィリアム・モリスの印刷工房』(湊典子訳、平凡社、1994年、\*\*Ag\*916\*\*)、関川左木夫、Colin Franklinの『ケルムスコット・プレス図録』(雄松堂書店、1982年、\*\*Ag\*616\*\*)では、印刷工房で制作された数々の書物とその解説がされている。

### (4) 日本における書物の共同作業集団

モリスの私設印刷工房設立に遡ること約300年、日本において共同作業によって刊行された書物に嵯峨本がある。嵯峨本は本阿弥光悦、角倉素庵によって版行された「わが国出版史上最も美しく、気品ただよ書物」と言われている。その一端を紹介したものが天理大学附属天理図書館編『近世の文化と活字本：きりしたん版・伏見版・嵯峨本...』(天理ギャラリー、2004年)である。また、嵯峨本の美術的装丁を詳細に解説したものとして川瀬一馬の『嵯峨本圖考』(一誠堂、1932年、Tsuchiya\*\*IV\*1640\*\*)がある。さらに辻邦生は『嵯峨野明月記』(新潮社、1979年、\*9180\*\*68\*\*64)において、嵯峨本の作成に関わった三人を主人公として、その内面を独白体で語らせた小説を書いている。

近代の文化と活字本  
天理ギャラリー

\*\*7400\*82\*\*

また、現代における書物に関わる作業集団として『田中一光回顧展：われらデザインの時代』(朝日新聞社、2003年)、杉浦康平一派の『疾風迅雷』(DNPグラフィックデザイン・アーカイブ、2004年、\*0200\*\*357\*\*)、幅広いデザインを制作するCAPの『雑誌をデザインする集団キャップ』(ピエ・ブックス、2004年、\*7200\*\*398\*\*)を紹介したい。現代において、書物をめぐる装飾がどのように変化したかを楽しんでいただきたい。

田中一光  
回顧展

\*\*7200\*357\*\*